

「一人では『できない』と思いついてしまふことも、二人ならば『できるかもしれない』に変えられる」。中澤孝氏は、そう語る。同氏が代表取締役を務める株式会社エコ・マテリアルの主力事業は、レアメタルや特殊金属等の精錬だ。設立から3年、法人化して2年。現在、まだ29歳という同氏は、なぜその若さで起業するに至ったのか。そこには血を分けた姉との強い絆と「運命」があった。

株式会社 **エコ・マテリアル**



代表取締役 中澤孝氏
(なかざわ たかし)

1980年、群馬県佐波郡玉村町出身。2003年、埼玉工業大学工学部を卒業後、上武産業に入社し、営業職に従事。その後、小宮山商事に転職し、金属や非鉄金属の回収および精錬技術を学ぶ。2008年、実姉の恵里子氏が個人事業として設立したエコ・マテリアルを株式会社に組織変更するとともに、代表取締役就任し、現在に至る。



専務取締役 中澤恵里子氏

精錬事業

に魅せられて 姉弟の進む道は、 時代が支えてくれる

注目を集めるレアメタル

いまや、「計算上では日本国民一人あたり、ほぼ1台を所有している」といわれる携帯電話、そして世帯普及率85%以上とされるパソコン。これらIT機器の普及とともに、大きな問題になりつつあるもの、それがいま注目を集めている「レアメタル」である。

レアメタルは希少金属とも呼ばれ、地球上における天然の存在量が少ない金属、あるいは存在量は

多くても品位の高いものや「純粋な金属」としては得がたいものを指す。具体的にはニッケル、コバルト、クロムなどだ。「非鉄金属全体」を示す場合もあるが、原則は金、銀などの貴金属以外で、産業に利用されている非鉄金属の呼称である。「使用されているのはIT機器だけではなくありません。例えば、デジタルカメラの手ぶれ補正機構やビデオカメラのレンズの研磨など、ありとあらゆる場所に存在しているのです」

そう補足してくれた中澤孝氏は、群馬県高崎市を拠点にレアメタル等の精錬事業を営む、エコ・マテリアルの代表取締役である。

同社は「個人事業から法人化し、株式会社となったのは約2年前」という、歴史の浅い中小企業。加えて経営者である孝氏自身も、まだ29歳という若さ。

ところが、驚くべきことに2007年に個人事業として設立以来、エコ・マテリアルは驚異的なスピードで成長している。世界

金融危機の勃発とほぼ同時期に誕生したにもかかわらず、年を増すごとに売上は「倍々ゲーム」を維持しているのだ。

孝氏は、「そもそも、設立した年の売上が誇れるようなものではなかったの」と照れくさそうに言いながらも、次のように説明する。

「確かに業績は年々上昇していますが、それは私の力だけで成し遂げられたわけではありません。さまざまな要因が重なりあったうえで結果だと思っています」

設立は、姉の「柔軟な行動力」によって

孝氏の言う「さまざまな要因」の二つに、「時代の後押し」がある。

現在、レアメタルは「現状のままであれば、数十年で枯渇する」と予測されている。それが、冒頭の「大きな問題」である。日本では経済安全保障の理由から供給停止等の障害に備えて「一部のレアメタルを備蓄しているが、並行して「リサイクルを目的とし、携帯電話や

2010年5月号
ビッグライフ

家電製品から取り出す事業」も行われているのだ。

つまり、「同事業が注目を浴びた時期とエコ・マテリアルが誕生した時期とがちょうど重なっていたこと」が、同社の成功につながったのである。

ところで、なぜ同氏はレアメタルや特殊金属の精錬といった、特殊な事業を選んだのだろうか。そのことを尋ねると、懐かしそうに語り出した。

「実は、先にこの事業を始めたのは姉だったのです」

姉とは、孝氏の実姉である恵里子氏。もともと大阪でいわゆるパティシエールを志していた同氏は、あるとき実父の友人から「金属の精錬業」という仕事があることを聞き、その技術と「環境や社会に役立つ」との点に深い興味を抱くようになったそうだ。

それは同氏にとって、よほどの衝撃だったのであろう。「すぐさま勤めていた川口市の製菓店を辞め、実家に戻ってきました。姉は朗らかな性格である一方、良い意味で柔軟な行動力をもっているのです」と孝氏は笑う。その後、独自に技術指導を受けた恵里子氏は、いまから3年前に個人事業としてエコ・マテリアルを設立したのだ。



工場設備



一方の孝氏は、まったく別の道を歩んでいた。埼玉工業大学工学部に在籍し、卒業後は砕石や砕砂の製造販売業を営む上武産業に入社。だが、「営業職に配属され、技術的なことは行っていないかった」と同氏は振り返る。決して会社に不満があったわけではないが、「理系畑」にいた身であり、徐々に「技術的な仕事に就きたい」との思いが募っていた。

ところが『まったく別の道』だと思っていたその道は、運命的にも少しずつ同じ方向へと進んでいたのだ。

依頼を「断らない」 ことで成長する

数年間営業職に従事した孝氏は、「技術職に就きたい」との思いを

捨てきれず転職。新たな勤め先では、「写真印刷の廃液に含まれる銀や、鉄・非鉄金属の回収から精錬まで」を行っていた。それは偶然にも、恵里子氏が魅せられた技術と同じものだった。

やがてエコ・マテリアルを法人化するタイミングで、運命に導かれるように孝氏も同社に入社し、同時に代表取締役となったのだ。

「姉からは、強制的に誘われたわけではありません。一番の理由は、『国レベルで必要とされる事業でありながら、取り組んでいる業者が少ない』と知ったからです。誰かがやるべきことなのであれば、姉とともに私もやろうと。私の決意を支えてくれた姉の存在があったからこそ、エコ・マテリアルを『二企業』にし、ここまで成長させることができたのだと思っています」

姉第二人の希望を乗せて起業に至ったものの、創業当初は人脈など「皆無」といっても過言ではなかった。そこでまず最初に考えたのが、ホームページを作成することだった。

さらに孝氏は、「頼まれたもの」がこれまで扱ったことのないレアメタルや特殊金属であっても、決して断らないようにしてきました。新しいレアメタルが来たら、それも一つの挑戦だと思って引き受けるのです。研究部署などを設けなくても、常に新しい「もの」が来るのですから、いわば一石二鳥。そうすることで、必然的に扱えるレアメタルや特殊金属の種類が増え、ロットも増加させることができるのです」と続けた。

その読みが当たり、ホームページを閲覧した顧客からの依頼は続々と増えていった。努力の甲斐もあって、いま現在の評判は「口コミ」で広がっているという。依頼者は、「エコ・マテリアルに任せれば、良い仕事をしてくれる」との絶対の期待をもっているが、孝氏はそのことに対し、プレッシャーを感じてなどいない。

「受けた依頼は、一つひとつに対して感謝の思いが伝わるようにとの気持ちを含め、『丁寧で、正確な仕上がり』『できる限り早いスピードで納品』『ギリギリの価格で提供』の三つをモットーに作業し、納入してきました」

もともと同氏は恵里子氏も、化学そのものに対する興味が大きいのであろう。化学に関する知識と技術は、気になる度に「業務に関係ないことまでも」自分で学んでいる。そんな探求心と若々しさが顧客にも伝わっているからこそ、「仕事を依頼したい」との思いを抱かせるのかもしれない。

「受けた依頼は、一つひとつに対して感謝の思いが伝わるようにとの気持ちを含め、『丁寧で、正確な仕上がり』『できる限り早いスピードで納品』『ギリギリの価格で提供』の三つをモットーに作業し、納入してきました」

もともと同氏は恵里子氏も、化学そのものに対する興味が大きいのであろう。化学に関する知識と技術は、気になる度に「業務に関係ないことまでも」自分で学んでいる。そんな探求心と若々しさが顧客にも伝わっているからこそ、「仕事を依頼したい」との思いを抱かせるのかもしれない。

常に把握し、技術力をうまく応用して、ニーズに合った金属を精製していかなければ」と力強く話す。

「硬さ」と「柔軟性」を兼ね備えて

前述の通り、「レアメタルのリサイクル」は国家的にも注目されている事業である。しかしその一方、「重要である」ことが明確であるにもかかわらず、半導体や自動車産業の製造工程で使用されるレアメタルについては、いまだに「有効に処理されていない」というのが現状なのだ。

孝氏は、「重要とされながらも、数が減り続けているのがこの業種。この2、3年の間にも廃業に追い込まれた同業他社をいくつも見てきました。手間と技術が原因だと思えますが、数年後には私たちと同じレベルの仕事ができる中小企業は全国的にも少なくなるはず。おそらく、関東にはエコ・マテリアル社のみになってしまうかもしれない」と言う。

その表情からは、複雑な胸の内が見え取れた。競争相手がいないかなれば売上は伸びるが、「エコ」をうたう企業であるからには、決して喜ばしいことではないからだ。

加えて、不安はほかにもある。

同社はこれまでの3年間、大々的な営業活動は行わず、インターネット経由での受注と口コミによる「技術営業」のみでここまで成長してきたのだ。そのため、今後さらに業績が上がることで従業員の間にも少しずつ「おごり」や「甘え」が生じる可能性がある。同氏は、それを危惧しているのだ。

「現在、規模は小さいながらも従業員教育には力を入れていきます。一人ひとりに責任感とともに評価を与え、モチベーションを保たせることに尽力しているのです」

続けて孝氏は、恥ずかしそうに「教育」が必要なのは、私も同じです。むしろ誰よりも必要といつてもよいくらい」と語った。

「代表とはいっても、まだ29歳。まだまだ若輩者ですから、人に教えることよりも教わることのほうが絶対に多いのです。だからこそいまはできるだけ長い時間、ほかの従業員とともに汗水垂らして、死ぬ気で働きたいと思っています」

その瞳に、甘えは見えない。それは自分の若さ、経験の浅さを誰よりも分かっているか

からこそ、自ら課した厳しさなのだ。つまりは「年齢や経験で企業としての価値を判断されたくない」との、意志の強さの表れであろう。

エコ・マテリアルが扱うのはレアメタルや特殊金属だが、そんな同氏の姿は、まるで「鉄」のような強靱な心を感じさせる。曲げたり、叩いたりを繰り返すことにより強くなる「鉄」。そして、その意志が「頑なにやり過ぎないように支えている」

のが、明るく朗らかで柔軟な発想と行動力をもつ、恵里子氏の存在なのかもしれない。

経験は、少しずつ積み重ねよう。若い姉弟には、「それだけ、たくさん時間が残されている」のだから。同社には若い力、硬い意志、さらに時代に対処する柔軟性がある。それらを武器に、さらなる成長を目指してほしい。

スパッタリングターゲット及びレアメタル精練事業

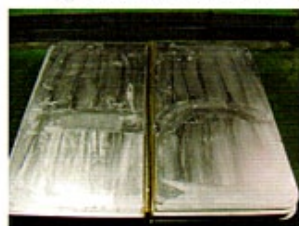


処理前 モリブデンインジウム付
(白っぽい箇所がインジウム)

化学処理
+
電気分解



処理後 モリブデンのみに



処理前 タングステンインジウム付
(白っぽい箇所がインジウム)

化学処理
+
電気分解



処理後 タングステンのみに



処理前 タantalのワイヤーピンに
鉄・アルミ・クロムが
数パーセント含まれている

化学処理
+
電気分解



処理後 タantalのみに
専用のパレル(閉鎖されている)
で化学処理にて精練している為
タantalのロスがない

亜鉛切りからの加熱による精練事業



処理前 亜鉛切り(切削屑)

加熱による精練



処理後 亜鉛(インゴット)

株式会社エコ・マテリアル

〒370-3347

群馬県高崎市巾室田町4212-1

TEL 027-386-2628

URL <http://www8.plala.or.jp/metal-ecomate/>